

時	論
新	論
理	想
論	

## 漫画漫談—独逸編

山中 由里子

(やまなか ゆりこ)

本館民族文化研究部



ドイツで売られている日本のアニメ雑誌

### ドイツのキオスクで

日本のアニメ、漫画の世界進出は、すでに一〇年以上も前から話題になってきていることであるが、今や漫画は大都市の一部の好事家の趣味の対象におさまらず、年齢的にも地域的にもさらに幅の広い消費者層のあいだに浸透してきている。それを感じさせるのは、ドイツの地方都市のごく普通のキオスクにまで登場するようになった子ども向けのアニメ雑誌だ。三年ほど前から見かけるようになった。

これらのアニメ雑誌はアメリカのコミック誌のような全頁色刷りの薄いものだ。日本の電話帳形式を真似た分厚い漫画雑誌も本屋に行けばあるのだが、キオスクで売るには分厚すぎるようだ。興味深いことにこの電話帳形式の雑誌は、日本のさまざまな雑誌に連載されたシリーズをドイツで再編集しているようで、いわゆる少女漫画と少年漫画がごちゃ混ぜになっている。薄いアニメ雑誌は男の子用と女の子用の明らかなジェンダーわけがされている。

まずは、表紙にくっついておまけが、子ども心をそそる。日本の「ふるく」は、厚紙を切り貼りして組み立てる、大人でも相応な器用さと忍耐を必要とする形式のものが多いが、ドイツの子どもの雑誌のおまけは、プラスチック製の、たいがい一日で壊れるおもちゃが主流だ。一〇歳前後の少女がターゲットの「Mega」誌のおまけは、アークセサリーや文房具、少年向けの「Mega」誌には、ゲームカードなどが付いている。中身はというと、例えば「Mega」の場合、ドイツで放映されているアニメ——「犬夜叉」など日本では一昔前に流行ったアニメから、最近の「プリキュア」名探偵「ナン」まで——のキャラクターを配した占いや心理テスト、漫画の描き方の手ほどき、さらにドイツのコスプレ大会の様子のレポート(日本のコスプレを真似し、金髪少女が金髪のかつらをかぶって、アニメのキャラ

クターに扮する)までが含まれている。これらに加え、日本文化の紹介の頁もある。例えば、日本人にとつての「花見」というイベントについて写真やアニメの一場面をとおして解説するといったものである。「サムライ」「イケバナ」のステレオタイプに固執しがちな、ドイツの博物館教育における日本文化紹介に比べるとはるかに現代的である。

### アイデンティティの拠りどころ

日独国際結婚家庭の一〇歳になる娘、Mちゃんは「Mega」誌を二〇〇四年の創刊号から熱心に読んでいた。どうもこのアニメ雑誌は、自分が半分日本人であるという自己意識の拠りどころになっているようだ。日本人の母親はそれをなんとも複雑な気持ちで見守っている。同じくドイツ在住のアフガン移民の子持ち女性にこの話をすると、「でもアイデンティティの拠りどころが、そうやって子どもの親しみやすいところにあるだけ幸せよ」と言う。確かにMちゃんは「Mega」が始める前、ティーンのお嬢様雑誌をたまに買ってもらっては、中国が舞台の「ムーラン」に心を寄せていた。アメリカ製の妙ちきりんな東洋趣味に共感されるよりは、「犬夜叉」に登場する、日本の「ごく普通の女子中学生」のヒロイン日暮かごめに自己投影してくれるほうがずっとましかもしれない、と日本人母は思う。